



# 夢の紅月



伽藍

(今宵も月は煌々と、)

そう、一一皓々と。

さくりと、足の下で枯れた葉が音を立てる。

僕は、暗い木々の間を歩いていた。

近所の森。日常からほんの少しだけ離れた場所。ここがどこかは判っているのに正確な場所は判らない、そんな場所。

刹那の間だけ、夢と現が入れ替わる、場所。そこに行く理由は、ただ一つ。『彼女』に会う為だった。

『彼女』は、僕の好きな人だ。誰よりも格好良くて漢前で、それでいて誰よりも女らしくて美しい人。

想いを自覚したのは、もう、随分と昔。

騒。

森が、哭いた。

いつも『彼女』はこの森にいた。ただこの場所に在るがまま、外に行こうともせず、けれど孤独に嘆くのもなく。世を悲観しているのでも、達観しているのでもない。僕には理解出来なくて、だから憧れて、憧憬の念がいつしか恋情に変わっていた。

森は、いつも葵い。春も夏も秋も冬も。まるで、『彼女』を守るように。

慈しむように、愛おしむように。

もしかしたら、閉じ込めるように。

それを鎖と評したら、それも道理と笑っていた。真綿と評したら、それも一興と笑っていた。

僕のこの森に対する印象は、

一一開かれた箱庭。

だから、僕はいつもここに来る。『彼女』の箱庭へと。

『彼女』は箱庭の持ち主で、そして箱庭の中の人形だった。望めば手に入る羽には見向きもせず、元から持っていた翹は自ら耄り取って、けれど自由なままの、美しい女王様。

だから、僕は今日もここに来た。『彼女』の箱庭へと。

さくり、さくり、葉を鳴らしながら、進む。

ふと頭上を見上げると、月が輝っていた。なんとなく嬉しくなって、僕は微笑む。誰に対するでもなく。

『彼女』には黒が似合う。喩えるならば黒揚羽。だから、月の許でよく映える。

『彼女』は、月が好きだった。

だってさ、と『彼女』は笑う。

――一月は、太陽程残酷ではないよ。

月は、太陽のように全てを白日に晒したりはしない。僕みたいに何も出来ない人間の醜い部分も、隠してくれる。

だから僕も、月が好きだった。

見えないものは見えないものそのまま。少しだけ静寂を長引かせて、音を響かせて、視界は澄んで、けれど何も見えない。

月は明るい。それでもこの箱庭の中では、それは半減されるのだ。

それが仮令、今日のような満月であっても。

だから、僕はここに来た。夜の闇を照らされたくなどなかったから、暗さの残るこの森へと。

僕は月が好きで、けれど同じくらい大嫌いだったから。

『彼女』はきっと、それでも笑うだろう。月が全てを照らしたとしても、太陽と同じ残酷さを持っていたとしても、いつものように。

道に、彼岸花が見える。季節は初秋だった。

月が、よく映える。

不意に、突風が吹いた。思わず眼を瞑る。そして少しだけ笑った。この突風は待ち望んでいたものだったから。

僕は口を開いた。

「こんばんは、――りんさん」

「おや、また来たのかい？ 歓迎するよ」

瞼を上げると、鬱蒼としていた森が、突然開けていた。見えるのは小さな池と、大きな岩。そして、その上にいつものように座っている『彼女』――りんさん。そこまで確認して、僕はふと瞬いた。

「あの、その子は……？」

りんさんの、すぐ近く。岩の横に、一人の女の子が立っていた。

臙脂色の着物が古風な印象の、少女だった。りんさんと、年は十くらい離れているだろう。もしかして、姉妹だったりするのだろうか。

そういえば、雰囲気も似ている――と、そこまで考えたところで、りんさんが声を立てて笑った。

「違うよ。この娘は私の妹ではない」

「……はあ」

そうなんですか、としか言いようがない。それ以前に、何故僕の考えている事が判ったのだろう。

少女が顔を上げ、ぺこりと頭を下げた。僕も釣られて似たような仕草で頭を下げる。くつりと一度喉を鳴らしてから、りんさんが言った。

「名前はさんちよと言う」

「さんちょ？」

何とも呼び辛い上に、変な名前だ、と思った。けれどそれを口にするのも憚られて、結局少女に微笑み掛ける。

「初めまして、……さんちょちゃん」

舌を噛みそうだ、とこっそり思った。

さんちょちゃんはにっこりと笑う。無邪気な笑顔だった。

「今晚は。さんちょってね、相手を思う華って書くんだよ。これで、さんちょ。本当は別の名前、いっぱいあるんだけど。これが一番好きなの」

相思華、で——さんちょか。

「君、のぞみって言うんでしょ？ りんから聞いたもの」

何もないのに、楽しそうだった。見ているこちらが、嬉しくなるような。

けれど少しだけ、寂しくなるような。

「今日はね、君を待ってたの。りんから聞いて、一回会ってみたかったから」

「そう、——なんだ？」

ちらりと、僕はりんさんを見た。一体どんな話をしたのだろうか。しかし本人は、面白そうに僕達を見ているだけだ。

彼女から聞き出すのは無理と判断して、さんちょちゃんに向き直る。そして驚いて、僕は少しだけ身を引いた。

そこそこに空いていた筈の距離が、一瞬にしてなくなっていた。相変わらずにここにこと、少女は笑っている。

「さ、さんちょちゃん……？」

「ねえ、のぞみ」

彼女は首を傾げた。

「正気と狂気の境目は、どこにあると思う？」

妙な質問をする。僕は仕方なく答えた。

「観測者の中に」

その答えに、満足したらしい。くすくすと、声を立てて笑う。

「満月と新月の境目は？」

「時の流れの中に」

「過去と未来の境目は？」

「一瞬後の時間の中に」

「自分と他人の境目は？」

「三千世界の理の中に」

「じゃあ——」

彼女は、言った。

「現と夢の境目は？」

「——」

答えようと、して。ふと、答えを持っていない事に気付いた。少女は言い募る。  
「あやかしとまやかしの境目は？」  
「――」

あやかしは、土に。  
まやかしは、空に。  
還る。

かえる。

「面白いものを、見せてあげる」  
にっこりと、彼女は笑った。

水面に、月は紅く。

唐突にそれを認識した。認識してから、意識が戻った事に気付き、その思考の矛盾から、自分が気を失っていた事を思い出す。

場所は先程から変わっていない。眼の前には一人の女性がいる。この箱庭の、女王。

「月は、太陽の光を映す鏡だ」

りんさんが口を開いた。先程までいた筈の少女の姿は、ない。

「そして、水面は鏡となり世界を逆さに映す。――ならば」

楽しげに。

「月に水面が映る事は、合わせ鏡という事になる。もしくは、人がその瞳で月を見上げる、それすらもね。だろう？」

「……何の事ですか？」

判らずに首を傾げると、くつくつとりんさんは笑った。ついと白い手を伸ばす。血の気を忘れたかのような、白。

空の月は、蒼く。水の月は、紅く。

「覚えておけ。こんな日は、何が起こっても可笑しくはないのだという事を」

示した先には、一輪の彼岸花が落ちていた。

僕が見たのは、靴の裏だった。

踏み潰される、とあって、眼が覚めて。

恐らく、時間にして十秒足らず。

「僕達は、何がしたいんだろう――」

呟く。そして、危うく踏み掛けた小さな花に、微かな笑みを向けた。

そこで、思い出す。

そういえば、昨日は晦日の月だった――。

そこで僕は、眼が覚めた。